孫 文 研 究

第 72 号

目　次

特集一　久保田文次先生を偲ぶ

久保田先生追悼特集序文 …… 緒形　　康（ 1）
久保田文次さんを送る …… 安井　三吉（ 2）
久保田文次先生を偲んで …… 安藤久美子（ 7）
久保田文次先生、「一路走好！」 …… 趙　　軍（ 9）
井戸を掘った人 …… 深町　英夫（15）
久保田文次先生と宮川家 …… 宮川　祥子（17）
久保田文次先生をしのんで …… 石川　照子（21）

特集二　ひょうごの人々と日中交流の源流（その一）

まえがき …… 蔣　　海波（24）
水越耕南と日中の漢詩人たち …… 柴田　清継（26）
対華新政策と太田宇之助
　　―江蘇省経済顧問時代の米糧・田賦政策を中心に― …… 島田　大輔（40）

孫文研究会2023年度総会報告 …… （60）
『孫文研究』投稿規程・執筆要領 …… （63）

孫文研究会会報

2023年7月

孙 文 研 究

第 72 辑

目　录

特集一　缅怀久保田文次先生

追悼久保田文次先生特集序文 ……绪形　康（ 1）
送别久保田文次先生 ……安井　三吉（ 2）
缅怀久保田文次先生 ……安藤久美子（ 7）
久保田文次先生,一路走好！ ……赵　军（ 9）
掘井恩人 ……深町　英夫（15）
久保田文次先生与宫川家 ……宫川　祥子（17）
怀念久保田文次先生 ……石川　照子（21）

特集二　兵库人士与中日交流的源流（其一）

前言 ……蒋　海波（24）
水越耕南与中日汉诗人 ……柴田　清继（26）
对华新政策与太田宇之助
—以江苏省经济顾问时代的粮食・田赋政策为中心— ……岛田　大辅（40）

孙文研究会2023年度年度报告 ……（60）
《孙文研究》投稿规程・执笔要领 ……（63）

孙文研究会

邮编 655-0047 日本国 兵库县 神户市 垂水区 东舞子町2051 孙文记念馆内

电话 +81-78-783-7172　传真 +81-78-785-3440　电邮 sunwen20@aioros.ocn.ne.jp

論　文

水越耕南と日中の漢詩人たち

柴田清継

はじめに

「水越耕南と日中の漢詩人たち」という題から、日本と中国の人たちが漢詩で交流をしたことに関する話だということがお分かりいただけるだろうが、これに付随していろいろな疑問も湧いてこられるものと思う。例えば、時代としては、いつ頃のことなのかとか、漢詩で交流をするとはどのようなことなのかとか。

日本人と中国人との漢詩による交流が一番盛んに行われたのは､明治時代である。江戸時代以前には、それほどではなかった。明治の次の大正時代、さらに昭和の戦前期までも少しは行われるが、だんだん下火になっていく。また、場所としては、漢詩による日中両国人の交流は、中国でも行われたが、それに負けず劣らず、日本国内でも行われた。

漢詩で交流をするとはどのようなことなのかと言えば、もちろん日中両国人が互いに漢詩を作り合うのだが、そもそもなぜ日本人が漢詩を作るのか、あるいは漢詩を作れたのかという疑問を抱く方も少なくないだろう。先ほど「江戸時代以前には、日中両国人の漢詩による交流は、それほどなかった」と書いたが、特に江戸時代にはほとんど無かった。にもかかわらず、江戸時代には、武士の学ぶ藩校の主要科目は「儒学」や「詩文」など、つまり漢詩漢文だった。武士以外の人たちが通う寺子屋でも、漢詩漢文に関する学習はかなりの程度行われていた。

それだけでも今の日本人が高校などで習う「漢文」とは、勉強全体の中での重要度が全然と言っていいほど違っていたのだが、もう一つ注意しておかなければならないのは、江戸時代の日本人は幼いころから漢詩漢文の勉強に集中的に取り組んだということである。外国語を勉強する時、10歳ごろまでに始めるかどうかで身につき方が違ってくるということがよく言われるが、当時の人たちは幼いころから集中的に取り組んだから、漢詩漢文の能力を、ある意味、深い所で身に付けた、言葉を変えていえば、体得したと言えるような面があったのである。

そのように、江戸時代の日本人の多くはせっせと漢詩漢文の勉強にいそしんでいた。江戸時代に著された書物を見てみると、初めから終わりまで漢文とか、序文など一部が漢文で書かれているものとかが数え切れないほど存在する。それくらい、いっぱしの教養人の大部分にとっては、漢詩漢文というものが、ごく当たり前のリテラシーの一つになっていたのである。にもかかわらず、本家本元の中国の人たちと漢詩漢文でやり取りする機会は訪れない。「鎖国」のためである。きっと力試しがしたくてうずうずしていたに違いない日本人に、ようやくその機会が訪れる。それは明治の開国である。これ以後、日中両国人はそれまでよりも自由に行き来することができるようになった。漢詩漢文の「他流試合」がしてみたかった日本人にとっては、待ちに待った時代の到来である。かくして、明治になると、日中両国人の漢詩での交流が一気に活発に行われるようになったのである。

明治以後の日中漢詩文交流の様子を知ることのできる史料は、日本の方により多く残っている。それらの史料を見てみると、漢詩文交流に携わった日本人は、政治家、官僚、財界人、教師、医者、豪農、宗教家、民間人等、漢詩文能力のある様々な分野の人たちにまたがっている。中国人の方も様々な分野にまたがるが、来日した中国人に絞って、これを大別すると、一つは民間人、もう一つは外交官である。民間人は何のために来たのか。主として営利目的である。日本に来て、書や画を制作し、売ってお金を稼ぐのである。当時の日本人には書画の愛好者や収集家が今よりももっと多かった。日本人の書画家も全国各地を回り、揮毫をして稼いでいたが、中国人の書画となると、「本場物」ということで、プラスアルファの価値を付けて評価される場合が少なくなかったのである。外交官の方はどうかと言えば、現在の中国大使館に相当する「公使館」というものが東京に、そして領事館に相当する「理事府」というものが、横浜・神戸・長崎に設置された。これらの都市では外交官との漢詩文交流も行われた。

さて、私が与えられたテーマは、神戸における漢詩文交流である。神戸は、当時の日中往来の要となる港町であったため、多くの中国人が立ち寄った。また、定住している中国人も多かった。いわゆる華僑である。のみならず、外交官も常駐していた。したがって、他の地域に比べて、より多彩な漢詩文交流の跡が確認できるが、本稿では主として外交官との交流の方を取り上げることにしたい。

筆者は様々な方面から資料を集めている。それらの資料を眺め渡して、明治・大正の時期に漢詩漢文の方面で顕著な活動をした兵庫県人を何人か挙げよということになると、水越耕南と橋本海関を外すわけにはいかないだろうと思う。橋本海関は、

蔣海波先生が取り上げられるので、本稿では水越耕南が主役ということになる。

一　水越耕南の生涯と著作

水越耕南は嘉永2年（1849）に生まれて、昭和8年（1933）に没した。名は成章、姫路藩の武術家水越丈の子である。その経歴をごく簡単に記すと、次のようになる。

宮谷益藏編『兵庫県官民肖像録』（博進社、1918年、51頁）

文久3年（1863。14歳）以後：姫路藩校に入り、菅野白華に就いて学ぶ。

慶応3年（1867。18歳）以後：藩費生に選ばれ、京都へ行き、中沼了三に入門。

明治2年（1869。20歳）：東京に出て、芳野金陵の塾に入り、かたわら大沼枕山にも詩文を学ぶ[1]。

同7年（1874。25歳）10月：神戸師範伝習所開設。その教師を嘱託される。

同8年（1875。26歳）：著作『読本熟字解』出版。

同9年（1876。27歳）：神戸師範伝習所教師を辞し、神戸裁判所勤務（判事補）。岡山裁判所に出向（翌年11月まで）。著作『開口新詞』、『万国地誌略字解』出版。

同14年（1881。32歳）：著作『薇山摘葩』出版。

同15年（1882。33歳）：著作『遊箕面山詩』、『唐宋詩話纂』出版。

同16年（1883。34歳）：著作：『游讃小稿』、『日本名家漢文作例』出版。

同17年（1884。35歳）：北風家の整理。著作『翰墨因縁』出版。

同18年（1885。36歳）：神戸裁判所退職。著作『皇朝百家絶句』出版。

同19年（1886。37歳）ごろ：西出町（神戸市内）埋め立て工事に関与、大阪セメント会社の整理に関与。

同20年（1887。38歳）：著作『登記法公証人規則註釈』出版。

同21年（1888。39歳）：河野主一郎・北風正蔵・徳新号等と海産物業を興したが、大失敗に帰す。著作『市町村制釈義』出版。

同22年（1889。40歳）：公証人制度の発足とともに、公証人となる。著作『公正証書嘱託人心得』出版。

大正7年（1918。69歳）：著作『懐人絶句十二首』出版。

昭和6年（1931。82歳）：公証人廃業。

同8年（1933。84歳）：2月26日没。享年85歳。

水越には校閲を担当した著作も少なくなく、それらは以下の通り。

明治14年：竹末朗徳編、水越成章閲『清朝近世十七大家詩選』。

同16年：越石斉著、水越成章閲『日本刑法・治罪法講解大全』。

同20年：福井淳述、水越成章閲『登記法公証人規則註釈』。

同22年：栗本又四郎著、水越成章閲『公正証書嘱託人必携』。

同23年：福井淳著、水越成章閲『日本商法釈義』、福井淳著、水越成章閲『府県制郡制釈義』。

大正8年：下田重復著、水越成章、木村稔校『天香遺稿』、下田譲緑著、水越成章、木村稔校『桂属遺稿』。

同12年：堀春潭著、水越成章耕南、大西直三古仙校『春潭遺稿』。

以上の簡略な叙述だけでは分かりにくい点もあるだろう。蔣海波先生との共著「漢詩人水越耕南（一八四九～一九三三）研究序説―その生涯と著作」[(2)]に詳述しているので、参照していただけば幸いである。

以上により、水越はいろいろな職業に携わりながら、同時に漢詩文の世界にも浸っていたことがお分かりいただけるだろうが、本稿で取り上げるのは彼が裁判所を退職して、実業界に足を踏み入れたものの失敗し、公証人の職に就くころまでの詩文活動ということになる。

二　本稿のテーマ研究のための資料について

本稿のテーマ研究のための一番中心になる資料は、明治17年出版の『翰墨因縁』だが、これは、現代人の目で見ると、かなり特異な書物である。

『翰墨因縁』は水越が、自分が交際した中国人（計25人）からもらった手紙や漢詩文を人物別に配列したもので、上下巻合わせてちょうど100丁に達する結構大部な書物である。プライバシー満載の他人の手紙を（おそらく）断りなしに刊行して公開するという、現在では考えられないようなことをやってのけたというか、本人としては、むしろこれほど多くの中国人と漢文でやり取りしてきたのだという誇らしい気持ちと、本場物の漢詩漢文に対する尊崇の念からやったことなのだろうが、いずれにせよ、この書物のおかげでいろいろな興味深い事柄が分かるのである。ただ、残念ながら、水越の作品は載っていない。

もう一つ、これは全国ほぼ共通の普遍的な事象だが、明治期、地域によっては大正期に至るまで、全国紙・地方紙のいずれにも、ほとんどの新聞に文芸欄があり、

短歌・俳句と並んで、漢詩文の作品が一定の頻度で掲載されていた。兵庫県の地元紙もその例に漏れない。

本稿では『翰墨因縁』所載の神戸理事府外交官関係の資料をメインとし、新聞資料の助けも借りて、漢詩文交流の様子を見ていこうと思う。

三　『翰墨因縁』に見える水越耕南ら日本人と清国外交官との詩文交流一覧

まず、『翰墨因縁』から窺える水越ら日本人と清国外交官との詩文交流の様相を概観しておこう。

明治12年

4月　廖錫恩（第二代理事）と呉広沛（理事府随員）が水越宅を訪問、唱和。

同13年

4月　清国外交官たちと共に摩耶山に遊ぶ。

8月　夜、共に浪花橋に遊ぶ。

同14年

10月7日　理事府で中秋の宴開催。馬渡漢陽（耕南の同僚、判事補）・鄭文程（翻訳官）・水越ら参加。

10月31日　重陽節の登高会。砂子岡の去来亭（葺合村の料理旅館）で宴会。馬渡・水越ら参加。

11月6日　徐寿朋（外交官）・呉広沛らアメリカへの赴任の途中、神戸に立ち寄る。その際、水越らと交流。

同15年

1月12日　馬渡宅で宴会。水越・松本（判事）・田中（検事）・野田（鉄道寮長）ら参加。

4月19日　神田松雲（紳商神田兵右衛門のこと）邸で花見の宴。

4月23日　布引の去来軒（＝去来亭）で宴を催し、廖錫恩を送別。馬渡・水越・鄭文程ら参加。

4月26日　広厳寺（こうごんじ）で楠公（楠木正成）の遺器を観覧。馬渡・宇佐美正忠(判事)・水越ら参加。

4月29日　常盤楼で宴会。廖錫恩を送別。馬渡・宇佐美・水越・鄭文程ら参加。

同17年

4月　黎汝謙（第四代理事）が京都の嵐山に遊ぶ。水越がそのことを詩に詠み、黎もこれに和する長詩を作る。

以上のうち、以下、呉広沛との交流と、廖錫恩との交流を取り上げ、それぞれ紹介してみようと思う。

四　呉広沛との交流

呉広沛、字は瀚濤、神戸理事府随員。まずは『翰墨因縁』上巻18頁所載の「己(ママ)卯暮春小集、水越君畊南草堂主人、出肴饌酣飲、樂甚。即席步原韻以贈之（以下略）」〔己卯(きぼう)暮春小集、水越君は畊南草堂の主人にして、肴饌を出だして酣飲し、楽しきこと甚だし。即席原韻に歩（韻字を合わせる）して以て之に贈る〕という長いタイトルの作品を見てみよう。明治12年、清国のジャーナリスト王韜が来日し神戸に滞在していた際の集まりで、呉広沛が水越に詩を贈られ、その返礼として詠んだものである。後半四句のみ挙げることにする。

生幸逢時文字福　　生まれて時に逢うを幸いとし　文字　福〔福をもたらす〕し
交雖異域性情通　　交わり　域を異にすと雖も　性情通ず
茫茫塵海求名者　　茫茫たる塵海に名を求むる者は
此樂應難我輩同　　此の楽しみ　応に我が輩と同じきこと難かるべし

異国の人と文字を通じて気持ちを通い合わせることのできる時代に生まれ合わせた喜びを謳い、このような喜びは俗界に功名を追い求める者には無縁だろうと締めくくっている。

その後、呉広沛は親の喪に服するため帰国。1881（明治14）年10月、再度出仕後、アメリカへ赴任すべく、その途上、この年の11月初旬か、それ以前に来日し、神戸に半日停留したが、かつて交流した水越や馬渡に再会する機会には恵まれぬまま、横浜へ向かい、15日後にアメリカへと出発した。海路16日、陸路7日をかけてワシントンに着いた呉広沛は、翌1882（明治15）年2月19日（陰暦の大晦日）に水越と馬渡の両人あて手紙を書き送り、この手紙を水越は5月6日以前に受け取った。その手紙が『翰墨因縁』上巻27-29丁に掲載されている。手紙は「水越、馬渡兩詩人大雅足下」との宛名の下、2年前の水越・馬渡との付き合い、神戸再訪時のすれ違いの無念さ、横浜からアメリカまでの旅程について述べた後、次のように続けている。

使署而外、鄉人絕少。貴邦人士、亦不多見。出門一望、皆碧瞳黃髮之儔、

正如李少卿所謂舉目言笑、誰與為歡。回憶神山、尋詩諏訪、聯屐湊川。此樂已如隔世。豈不怪哉。幸節署清閒、案牘稀少。一編靜對、如覩故人。（以下略）

大使館の外には我が国の人は全然と言っていいくらい見当たらないし、貴国（日本）の人士もあまり見かけない。外に出て見回すと、紅毛碧眼の人たちばかりで、まさしく漢の時代、匈奴に降参して匈奴の地に留まること20余年で病死した李少卿（李陵）が「談笑して楽しもうにも、全く相手がいない」と嘆いたのと同じような気持ちである。神戸で諏訪山や湊川で交歓したことが思い出されるが、そのような楽しみはまるで別世界のことのようになってしまい、不思議な感じがする。幸い大使館内はのんびりとした状態で、書類の数もごく少ない。貴簡にじっと相対（あいたい）していると、大兄のご尊顔が瞼に浮かんできます。…

僅かな人数で遠いアメリカに滞在している心細さから来るものも勿論あっただろうが、神戸での水越らとの詩文交流の思い出が掛け替えのないものになっていた、呉広沛の心中が吐露されていると言っていいだろう。

五　廖錫恩との交流と送別

廖錫恩（1839～1887）、字は枢仙。第二代理事。明治12年5、6月ごろから水越らと交流した。ここでは、彼の離任の日が近づいてきた15年春の交流の様子を見てみたい。

まず、この年4月26日の『神戸新報』の記事を掲げよう。

當港在留清國領事寥（ママ）錫恩氏には去る廿三日を以て、文字の舊交ある水越成章・馬渡俊猷の二君、及清國人鄭文程、幷在領事館張芝軒・黄吟梅・揚硯池・廖鏡池・張百朋の諸友を布引山去來軒に招き、盛なる別宴を開かれたり。

もともと全くなかった句読点等を適宜打ったので、これで文意の説明は不要になっただろう。去っていく側の人が開いたわけだが、その「別宴」への招待状の文章が『翰墨因縁』上巻9～10丁に掲載されている。この年の4月23日は旧暦の3月5日で、不祥を祓う伝統的行事「春禊」の日の二日後だった。

畊南知兄大人青及行有日矣、思之悵然。今幸將去未去之時、正千金一刻也。擬于明日午後三時即陽歴（ママ）二十三號登布引山去來軒、補修禊、藉圖良晤。肯轉致

漢陽兄。屆期同來敝署、並轡徐行、固妙。抑有故、或先或後、亦無不可。時不再來、切禱切禱。此請文安。諸希

心照。不盡。

漢陽兄均此不另。弟錫恩頓首。三月五日（以下略）

出発の日が近づいてきたことを思うと、悲しくなってくる。幸いにもまだ留まっていられる今は、まさに千金一刻の時である。明日午後3時に布引山の去来軒でお目にかかり、二日遅れながら禊を修めるという意味も込め、意義のある出会いの機会としたい。…としたうえで、馬渡への言伝も頼んでいる。

『翰墨因縁』上巻には、別宴で詠まれた黄吟梅の作（七言絶句）二首と、鄭文程の作（七言絶句）三首が掲載されている（前者は47～48丁、後者は33丁）。

3日後の4月26日（水）には、日本側からの返礼としての誘いがあり、水越が馬渡・宇佐美とともに、廖錫恩を誘って広厳寺へ楠公の「遺器」の見物に出かけ、その後また宴会となり、詩文交流が行われた。廖錫恩の詩8首が『翰墨因縁』上巻14丁以下に掲載されている。

その第1首は「壬午三月九日、水越畊南、與馬渡・宇佐美、邀遊廣嚴寺。觀楠公遺器、感賦」〔壬午三月九日、水越畊南、馬渡・宇佐美と、邀えて広厳寺に遊ばしむ。楠公の遺器を観、感じて賦す〕と題する作。詩句は省略。

第2首は「纔得一絶、而畊南詩成、即次韵續之」〔纔（ようや）く一絶を得たれば、畊南の詩成り、即ち次韻して之に続ぐ〕と題する作。廖錫恩がどうにか絶句一首をものしたところで、水越の詩もできあがったので、すぐにその詩に次韻する詩を作ったということである。詩句は省略。

第3首は「馬渡亦次韵相答、再續賡之〔馬渡も亦次韻して相答う。再び続ぎて之に賡す〕と題する作。「私の詩に漢陽も次韻して、私への答えとなる気持ちを詠んでくれたので、またこの漢陽の作にも次韻した」ということ。その詩句は次の通り。

三年曾此結芳隣　　三年　曾此（これまでここ）に　芳隣と結べるも
明日初嘗別味新　　明日は初めて嘗めん　別味の新たなるを
定卜春花與秋月　　定めしトす　春花と秋月と
毎當宴會憶同人　　宴会に当たる毎に　同人〔志や道を同じくする友〕を憶わん

3年間の素晴らしい仲間たちとの交遊、迫って来た別離の場面が頭に浮かんでき

て、話し言葉は通ぜぬとも、詩や筆談を通して考えや気持ちが通い合ったあなたたちのことを、今後も宴のたびに懐かしく思い出すだろうと詠んで、締めくくっている。

第4首は「三疊前韻」〔三たび前韻を畳む〕と題する作。その詩句は次の通り。

奔走天涯若比鄰　　天涯を奔走するも　比鄰（隣同士）の若(ごと)し
霜侵兩鬢歲華新　　霜　両鬢を侵し　歲華　新たなり
卅年消盡英雄氣　　卅年　消え尽きたり　英雄の気
低首焚香拜美人　　首(こうべ)を低れ　香を焚きて　美人を拝す

この年43歳の廖錫恩が転句で「英雄の気概が消えてしまった」と歌っている。それは両鬢が白髪交じりになって来たという承句を受けてのことでもあるが、むしろ宴席に侍る奇麗所にでれでれとしている己が姿を自嘲してもいるのである。ユーモアの作である。

第5首は「席間宇佐美吹簫賦似」〔席間　宇佐美　簫を吹く。賦して似(あた)う〕と題する作。詩句は省略。

第6首は「醉後有藝者、捧扇請題。信筆揮之」〔酔後　芸者の、扇を捧げて題せんことを請う有り。筆に信せて之を揮う〕と題する作。扇子に何か揮毫してくださいなと芸者に所望されたので、筆の赴くまま書いてやったという意味の作であること、言うまでもない。詩句は省略。

第7首は「有老藝者、見而生羨、亦捧扇請題。胡謅調之」〔老芸者の、見て羨みを生じ、亦扇を捧げて題せんことを請う有り。胡謅して之を調(からか)う〕と題する作。くだんの芸者を羨んだ年増芸者にも揮毫を所望され、今度はからかい半分でこれに応じたのである。詩句は次の通り。

一樹老梅欹　　一樹の老梅　欹くも
着花無醜枝　　花　着けば　醜枝無し
多情白司馬　　多情なる白司馬
倚醉寫新詩　　酔いに倚りて　新詩を写(か)く

起句には廖錫恩自身、「扇面半畫楳花」〔扇面　半ば楳花画かれたり〕との注を付けている。老芸者が差し出した扇子には初めから梅花の絵があったのだが、これ

を傾いた老梅と表現し、さらに、そんな梅の木でも花さえ咲けば、それなりに美しいというのが承句。承句は梅堯臣（1002～1060）の「東渓」詩の「老樹著花無醜枝」（老木でも花を着ければ醜い枝はないの意）を踏まえている。詩の後半は幾人かの家妓を抱えていた唐の詩人、白居易に自分を見立て、あなたのような年増芸者にも私はそれなりに惹かれて、こんな詩ができたのですよと結んでいる。

第8首は「賦別畊南友兄、即請吟正」〔賦して畊南友兄に別れ、即ち吟正を請う〕と題する作。浮ついた気持ちを引き締め直して、連作を締めくくっている。

論文講藝歳經三　　文を論じ　芸を講じて　歳　三を経
孔孟儒宗理窟探　　孔孟儒宗の理窟をば探りぬ
別後同人勞梦寐　　別後　同人　夢寐を労〔たびたび夢に見る〕せんも
最難忘處是畊南　　最も忘れ難き処は　是れ畊南

承句を額面通り受け取れば、儒教に関する議論などもしていたことになる。また、詩の後半には、廖錫恩にとって水越耕南が最も深い印象を残した人物であったことがはっきりと表明されている。

六　公使黎庶昌との交流

最後に、もう一つ、『翰墨因縁』刊行後の、明治23年の水越と当時の公使黎庶昌との交流の一齣を取り上げてみたい。

黎庶昌（1837～1898）は第二代（明治15年2月中旬から約1年間）と第四代（21年1月）の二度にわたり公使を務めた人。この黎庶昌と水越とが神戸で唱和した作品数首が、23年9月9日の『神戸又新日報』に載っている。まずは黎庶昌の次のような作品。

須磨海濱保養院得晤水越君喜而有作兼簡奈良土屋弘〔須磨海浜保養院にて水越君と晤（あ）うを得、喜びて作る有り、兼ねて奈良の土屋弘に簡（手紙で送る）す〕
黎庶昌

水越成章土屋弘　　水越成章　土屋弘
八年前已（ママ）稔時名　　八年前　已（すで）に時名〔声名〕を稔（し）りぬ
江都英彦皆吾識　　江都〔東京〕の英彦〔優秀な人〕は皆　吾識れり
紅葉詩編待子賡　　紅葉の詩編は子（し）が賡〔＝和〕するを待たん

神戸山川兵庫客　　神戸の山川　兵庫の客
須磨雲海奈良城　　須磨の雲海　奈良の城
此行不數清游快　　此の行は清游〔優雅な遊山〕の快きに数えざる〔とは言えない〕も
且喜文縁接兩生　　且く喜ぶ　文縁　両生〔二人の方〕に接(つな)がるを

須磨海浜保養院とは、これより1年数か月前の22年5月に須磨の一の谷古戦場跡に竣工した「貸別荘」、今風に言えばヘルスセンター。黎庶昌はそこに滞在していた。土屋弘（1841-1926）は当時、奈良県師範の校長。第2句の「8年前から声名を知っている」というのは、日本に着任した時から既にということ。詩の第7句の表現や、そもそも「保養院」に滞在していることからして、体調が必ずしも万全ではなかったのだろうが、この後、9月8日に徐福の墓を見るために、神戸から船で新宮に行っている（『拙尊園叢稿』所収「訪徐福墓記」）ので、それがこの関西旅行の主たる目的であって、神戸に来たのはそのついでだったのではないかと思われる。なお、「紅葉詩編」云々については後で言及する。

さて、第1句からして既に「間に合わせ」的な感じのする（たまたま平仄が合ったからよかったが）この詩を詠んだ黎庶昌は、次のような詩も詠んでいる。

席上口占率呈水越畊南一粲〔席上口占し、率(そつ)として水越畊南に呈す。一粲(いっさん)（お笑いを）[3]〕
遽從保養須磨地　　遽(にわ)かに保養に従う　須磨の地
邂逅詩人水越章　　邂逅す　詩人　水越章
一曲清歌紅袖舞　　一曲の清歌　紅袖〔芸者〕舞う
海天風月意何長　　海天の風月　意何ぞ長き

これに対し、水越は次韻の詩を2首作っている。ここで、本稿で初めて日本人の、また水越の作品が出てくる。

次韻奉呈黎星使〔次韻して黎星使（帝王の使者）に奉呈す〕　　水越成章
海外大名推泰斗　　海外　大名　泰斗と推す
杲然報國有文章　　杲然(こうぜん)として〔輝かしく〕国に報い　文章有り〔腕を振るっておられる〕

疎狂何幸陪筵末　　疎狂〔放縦で常軌を逸する私が〕　何ぞ幸いなる　筵末に陪する
始慰十年瞻仰長　　始めて慰めたり　十年〔概数〕　瞻仰（せんぎょう）〔仰ぎ敬う〕すること長かりしを

転句の表現は、後の方の3字だけ見ると、第三者が催した宴席に呼ばれたようにも解されるが、そうではなく、最初の4字に重点を置いた方がいいと思われる。具体的に想像してみると、黎庶昌が須磨に滞在していることを知った水越が身の程知らずにも、自ら黎を宴席に招待し、かたじけなくも出席してもらう栄に浴したという喜びを詠んでいるのではないだろうか。思い切ったことをするというか、進取の気性に富むともいえる彼の人柄の一端が表れている。もう一首。

又用前韻〔又前韻を用いる〕
何料皇華到此鄉　　何ぞ料らん　皇華〔命を奉じた使者〕　此の鄉に到らんとは
不妨花月入平章　　妨げず　花月〔美しい景色〕をば　平章に入れ〔評価の対象にする〕んこと
留將村雨松風跡　　村雨　松風の跡を留めて
一曲清歌引興長　　一曲の清歌　興を引きて長し
此日侍妓三木松首奏村雨松風事一曲〔此の日　侍妓（お抱え芸者）三木松　首めに村雨松風の事一曲を奏す〕

水越自らが付けた注記にあるように、この日は芸者が須磨に伝わる在原行平と松風・村松の物語を謳って興を添えたようである。

ここで黎庶昌の最初の詩に戻り、その第4句―「紅葉の詩編は子が賡するを待たん」に目を向けてみよう。「紅葉」とは、東京・芝の高級料亭「紅葉館」のことで、黎庶昌は在任中、春や秋にしばしば日本・中国・朝鮮の名士（朝野いずれも）を招いて、ここで盛大な宴会を開いた。黎庶昌はこの年の重陽節（陽暦では10月22日）にもまた紅葉館での大宴会を計画していたようで、この句は、水越に対しその時に詠まれる詩に和する作品を、あなたも作ってくださいという呼びかけだった。この時の作品集は公使館の随員孫点（1855～1891）の手でまとめられ、『庚寅讌集三編（こういんえんしゅうさんぺん）』として刊行されるが、その附録に水越の詩二首が収載されている。彼は会に直接参加するのではなく、事後作品を郵送し、東京在住の詩人亀谷省軒（1838～1913）

を通して届け、黎庶昌との約束を果たしたのである。

おわりに

コミュニケーションの第一の手段は、口頭言語、つまり口で話す言葉だろうが、当時の日本人には、中国語を自由に話せる人は極めて少数だった。現代であれば、それだけでコミュニケーションの道はかなり閉ざされてしまうわけだが、今から百数十年前には、漢詩漢文を通じて日中両国人が意思疎通をすることのできる状況があったのである。もちろん、紙に書いて見せ合うという手間はかかるが、漢詩の場合、短い言葉であっても含まれる意味の幅が広く奥行きが深いので、思いのたけはかなり深いところまで伝えることができたのではないだろうか。本稿は、そのような時代の神戸での事例のほんの一面を紹介したものに過ぎないが、国際交流の歴史の一齣として、何らか参考になるような点があれば幸いである。

柴田清継（SHIBATA　Kiyotsugu　武庫川女子大学名誉教授）

参考文献

蔣海波「明治前期東亜文化交流の一側面―漢詩人水越耕南の交友を中心に―」、武庫川女子大学関西文化研究センター関西文化研究叢書１２『東アジア三国の文化―受容と融合』、2009年3月。

（※以下は、武庫川女子大学リポジトリ所収。）

柴田清継・蔣海波「水越耕南（一八四九～一九三三）研究序説―その生涯と著作」、『武庫川国文』第72号、2009年3月。

柴田清継・蔣海波「水越耕南の初期の作品とその漢詩文ネットワーク―『開口新詞』と『薇山摘葩』をめぐって」、『武庫川国文』第73号、2009年10月。

柴田清継・蔣海波「水越耕南と『萍水相逢』―併せて萍水吟社について」、『武庫川女子大学紀要人文・社会科学編』第57巻、2010年3月。

柴田清継・蔣海波「水越耕南と清国文人との文藝交流―清国駐神戸理事府初代・第二代の外交官を中心として―」、『日本語日本文学論叢』（武庫川女子大）第5号、2010年3月。

柴田清継・蔣海波「鄭孝胥と神戸、関西の文人たちとの文藝交流」、『武庫川国文』第74号、2010年11月。

柴田清継・蔣海波「水越耕南と清国外交官との文藝交流―1880年代を中心として」、『武庫川女子大学紀要人文・社会科学編』第58巻、2011年3月。

蔣海波「晩清外交官員在開港城市神戸的詩文交流――以水越耕南《翰墨因縁》為中心」、『中華詩詞研究』（中国・復旦大学）第4輯、2018年11月。

註

(1) 芳野金陵・大沼枕山は、明治初期漢詩壇の両巨頭。

(2) 末尾の「参考文献」欄を参照されたい。

(3) 「一粲」は贈答詩で自作を謙遜する時に用いる常套語。ふざけているわけではない。

SUN YAT-SEN STUDIES

Journal of Association for Sun Yat-sen Studies

No.72（July 2023）

Special Feature 1　Remembering　Professor KUBOTA Bunji（久保田文次）

A Preface to the Special Feature in Memory of Professor KUBOTA Bunji ……OGATA Yasushi（ 1）

A Farewell to Professor KUBOTA Bunji ……YASUI Sankichi（ 2）

In Memory of Professor KUBOTA Bunji ……ANDO Kumiko（ 7）

Professor KUBOTA Bunji, "Farewell" ……ZHAO Jun（ 9）

Drink Water and Appreciate its Source - We are Grateful ……FUKAMACHI Hideo（15）

Professor KUBOTA Bunji and Miyagawa Family ……MIYAGAWA Shouko（17）

In Memory of Professor KUBOTA Bunji ……ISHIKAWA Shouko（21）

Special Feature 2　The People of Hyogo and the Origins of Japan-China Cultural Exchanges（Part 1）

Foreword ……JIANG Haibo（24）

MIZUKOSHI Kounan（水越耕南,1849-1933）and Chinese Poetry Poets from Japan and China ……SHIBATA Kiyotsugu（26）

Japan's New Policy toward China in Sino-Japanese War and OTA Unosuke（太田宇之助,1891-1986）……SHIMADA Daisuke（40）

Report of the 2023's Annual Actiity ……（60）

The Submission Guidelines and Writing Instructions of *SUN YAT-SEN STUDIES* ……（63）

Association for Sun Yat-sen Studies

Edition Board: c/o Sun Yat-sen Memorial Hall

2051 Higashi Maiko-cho, Tarumi-ku, Kobe, Hyogo Pref., 655-0047,Japan

Tel +81-(0)78-783-7172 Fax +81(0)78-785-3440 E-mail sunwen20@aioros.ocn.ne.jp